



千二百年の歴史の路を歩く旅へでかけませんか。

出羽の古道

六十里越街道



山形県鶴岡市
あさひむら観光協会



六十里越 
60-ri Goe Kaido

出羽の古道 六十里越街道

1200年の時を重ね、
さまざまな時代の面影を残す歴史街道

庄内地方と内陸を結ぶ「六十里越街道」は、1200年前の古代から開かれたと伝えられる。鶴岡から松根、十王峠、大綱、塞ノ神峠、田麦俣を経て大峠峠を越え、志津、本道寺、寒河江を通り山形に至る険しい山岳道であり、庄内と内陸を結ぶ唯一の街道であった。古代から開かれていたとされているが、開削された時期は明らかではない。

最も古い説として、「出羽国」が設置された時、藤島町（現鶴岡市）に置かれた出羽国府と最上と置賜の郡の役所を結ぶ官道として開かれたというが、他にも様々な説がある。

山岳信仰の盛だった室町・江戸時代には、湯殿山を目指す「お山詣り」と共に東北・関東の各地から訪れる行者（参詣者）で賑わった。戦国時代には、最上と庄内が領国支配の争いを繰り広げ、街道は軍兵と軍旗でうめつくされたという。一方で庶民の生活にも欠かせない道として、庄内からは魚介類やローソク、内陸からは紅花や真綿、豆や葉タバコなどが背負って運ばれた。

明治30年代に入り新道が開通すると旧街道は表舞台から退いたが、苔むした沿道には今も時代の名残をとどめる数多くの史跡が眠っている。

六十里越街道 こぼれ話

naruhodo 60-ri Goe Kaido!

- 江戸時代、湯殿山信仰が隆盛を極めると、街道筋の宿場は栄え、清水が湧く夏茶屋では冷やしあんこ餅やとろころんが飛ぶように売れた。荷物を背負う運搬人「背負子（しよいこ）」や荷馬も繁盛し、1年商売すると10年は寝て暮らせると言われるほどだった。
- 明治時代、大峠峠では志津と田麦俣の郵便局同士で、郵便物を所定の木などに結んで受け渡していた。
- 「お山詣り」に行く前には、身を清めるための厳しい修行が必要だった。男子は15歳になると無病息災を願い、「お山詣り」に参加させる習わしがあった。

「六十里」はどこからどこまで？ 街道名の由來說

六十里越街道の名前の由来には諸説がある。

「六十里」という表現が登場するのは、戦国時代末期「六十里坂」を越え、山形から庄内に向かった場面を伝える物語が最初ではないかといわれる。（軍記『奥羽軍談』より）現在の尺貫法ではなく、かつての日本には大道という里程（りてい）換算（36町=1里）と、小道という換算（6町=1里）があった*が、どちらも山形市と鶴岡市を結ぶ国道112号の総延長（98.6km）とは一致しない。今でも謎であるが、結局全区間ではなく、途中の一部区間を指したものであっただろう。

*1町=60間=約109m

名前の由来となった
主なルート

- その1：松根～大峠峠～本道寺
- その2：大綱～大峠峠～砂子関
- その3：渡前（旧藤島町）～大日坊～大日寺

湯殿山と真言四ヶ寺

湯殿山信仰の中心となる真言四ヶ寺として、大日坊・注連寺・大日寺・本道寺は湯殿山別当となっていた。湯殿山への参詣者はこの四ヶ寺や周辺の宿坊に宿泊し、先達の案内により湯殿山へ参詣する習わしだったという。それぞれの衆徒が集まり、様々な役を受け持って寺を盛り立てていたが、明治維新後の神仏分離の混乱の中で、湯殿山が神社となり、その後、大日寺と本道寺も神社となったが、大日坊と注連寺は真言宗の寺院として現在まで続いている。



江戸後期の庄内二郡名所一覽全図の一部
(鶴岡市立郷土資料館 蔵)



昭和初期の笹小屋 (鶴岡市郷土資料館 蔵)

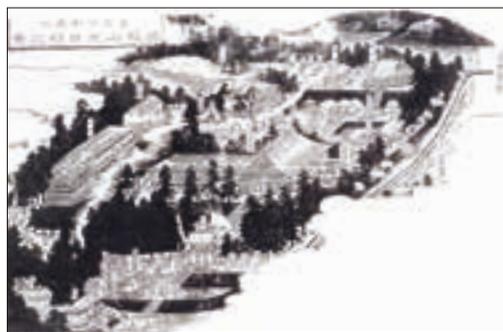
笹の葉で屋根を葺いた休み小屋で注連寺と大日坊より出向いて、行人や旅人に賸いをしていた。明治末期頃には地元民により茶屋が経営された。

齋藤茂吉は長男茂太の「十五詣り」を行い、笹小屋に宿泊している。(昭和5年7月23日)「谿ぞこの笹小屋といふ一つ家に足をちぢめて共にねむらぬ」と詠んでいる。



弘法茶屋ヨリ田麦村溪橋眼下 (鶴岡市郷土資料館 蔵)

蟻腰坂を上りきった先にある。慶応元年(1865)に越後村の人たちが奉納した石灯籠や湯殿山碑、天保13年(1842)大日坊の導師が建立した「湯殿山開基祖 弘法大師供養」塔が残っている。茂吉と茂太らがもちを食べたと記している。茂吉の「田麦俣を眼下に見る峠にて餅をくひぬわが子と共に」の歌碑も建っている。



湯殿山大日坊之景 (鶴岡市郷土資料館 蔵)

旧大日坊は明治8年(1875)火事で焼失したが、大綱上村の旧地に一山を構えていた頃は、正面に本堂・庫裏が並び、山の斜面に開山堂・観音堂などが点在し、入口正面に山門、右側に仁王門などが建ち、当時の本堂は間口42間(約75m)、幅12間(約22m)の堂々たる大伽藍だったという。一度に千人もの行者が宿泊できる客殿もあった。

出羽三山とは…

人々の願いをのせ、凜とたたずむ東北の霊山

月山・湯殿山・羽黒山は平安時代から出羽三山と呼ばれ、東北における修験道の中心地として、また祈りの対象として民衆の信仰が厚い霊山だった。三山と呼ばれるのは元龜・天正(1570-92)頃からである。それ以前は、羽黒山・月山・葉山を三山とする時代もあったが、湯殿山は「総奥之院」と呼ばれ別格にあった。

日本の古代信仰の柱は「自然崇拜」と「祖霊信仰」であるといわれ、自然崇拜の象徴は神への信仰となり、祖霊信仰の象徴は仏への信仰となって現在まで続いている。出羽三山は、明治維新の神仏分離により神を信仰の対象としているが、湯殿山は巨岩を御神体として山中には社殿がなく、御神体の傍らには「岩供養」と呼ばれる先祖の霊を祀る祠と水の滴る岩があり、二つの古代信仰が残存している。三山それぞれに国家や民族社会との関わりや歴史の歩みに違いがあるが、三山全てが備えていた古来の信仰の姿をピュアにとどめているのが湯殿山といえるだろう。

総奥之院 湯殿山

今も多くの人々を魅了し続ける、湯殿山の魅力と歴史

湯殿山は熱湯が湧き出る巨岩を御神体とし、人々は豊穡を祈願し命のよみがえりを託して祈った。室町時代の初期までは出羽三山のうち月山が信仰の中心であったが、真言修験の隆盛とともに大日如来を祀る湯殿山へ三山信仰の主体が移った。修験行者たちは護符を作って各地を回り、東北・関東へ湯殿山信仰を広めていった。湯殿山への信仰が隆盛を極めた江戸時代中期～後期には、参詣者が年間数万人に上ったと伝えられ、丑年御縁年にはその三倍になったという。享保18年(1733)には15万7千人に達した記録が残る。この頃、湯殿山詣りは「お山詣り」と呼ばれた。



六十里越街道 こぼれ話

naruhodo 60-ri Goe Kaido!

- 湯殿山は別名「恋の山」と言われているが、一度参詣すれば「お山」に魅かれて何度でも訪れたいくなるという名づけられたという説がある。
- 湯殿山詣りの土産品のうち、湯殿山の掛け軸は登山前に買い求め、霊場の気を込めて持ち帰る習わしがあったという。

時空を超えて存在する、奇跡のひと



月山と羽黒山で修業した行者が、悟りの境地に入るとされる湯殿山。湯殿山の真言宗系の寺院には「即身仏」という独特の信仰が残されている。湯殿山系の即身仏は、我が身を犠牲にして数多くの人々をこの世の苦しみから救出するため、自身の強い意志によって修行を積み重ねて自ら仏になった。この意味での即身仏が伝統として数多く出現した山は全国でも湯殿山の他にはない。真言密教では人間が大日如来の力により生きたままで仏になることができると説いており、また弘法大師の高野山入定伝説も湯殿山系即身仏の誕生に大きな影響を与えたという。

湯殿山の行人には厳しい修行を積んだ「一世行人」がおり、江戸時代初期以降この中から即身仏となる人々が現れた。五穀(米・麦・粟・ヒエ・豆)断ち、十穀断ちを経て木の実等(もくじき)を1千日以上続け、最後には生きながら土中に入り錫を鳴らし仏の名を称えながら死を待ち、声や音が途絶えて三年三ヶ月後、信者らに掘り出され仏様として祀られた。庄内地方の即身仏は湯殿山信仰の聖地「仙人沢」で厳しい修行を積んだ。現在、庄内には湯殿山系の即身仏が六体あり、六十里越街道沿いには三体が残っている。

- 本明海上人(不動山本明寺)
- 真如海上人(湯殿山総本寺大日坊)
- 鉄門海上人(湯殿山注連寺)

六十里越街道 こぼれ話

naruhodo 60-ri Goe Kaido!

苦しむ衆生と自己を救うために厳しい修行を積み、即身仏になられた行人たちの“気持ち(志)”に手をあわせましょう。



1 弘法の渡し
一本松が目印。古木の下には弘法大師が祀られている。



2 「楸田〇〇」の石碑
「楸田」は「秋田」のことか? 「木」を取ってつけた伝承が残る元治元年(1864)の湯殿山碑。碑の裏には「楸田〇〇」と10人の名も刻んである。〇〇ははっきりしない。



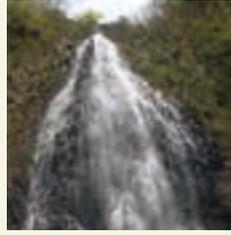
3 追分石
「右湯殿山 左大滝」と刻まれている。



6 不動山 本明寺
文禄元年(1592)、心月上人により開創され、多くの信者と弟子に恵まれていたが、羽越争乱に巻き込まれ荒廃の一途を辿る。40余年の時を経て、注連寺で出家した本明海上人により往時の繁栄を取り戻した。本明海上人が即身仏となるべく入定した入定塚があり石碑が建立されている。
☎0235-53-2269(要予約)



9 湯殿山 注連寺
天長10年(833)に弘法より開創され、明治の廃廟の際には、真言宗の仏生する苦難の道を貫いた。本堂天井には伝統絵画が展開され、存分。境内には七五三掛木の碑が建つ。
2009年ミシュラン★☆☆
☎0235-54-6536



4 大滝山
追分石から40分ほど歩くと大きな滝を見ることができる。



5 大滝山湯殿山碑
大滝の手前の平地に鉄門海上人、鉄龍海上人、山神の三基の石碑が建っている。近くには大滝不動尊の建物跡の石組が残っている。



5 大滝山湯殿山碑
大滝の手前の平地に鉄門海上人、鉄龍海上人、山神の三基の石碑が建っている。近くには大滝不動尊の建物跡の石組が残っている。



7 十王峠
庄内側の結界で、ここまでが俗界となり、ここから南が聖域とされた。かつては十王堂があり、閻魔(えんま)大王木像が祀られていた。



8 イタヤ清水
清らかな水がわき続け、小さな石の六地藏が祀られている。この清水を飲む際は、地藏に6回水をかけてからいただく。名前の由来はイタヤの木が茂っていたからとか、とても冷たい清水のために飲むと歯が痛むほどだったからと言われ、旅人の憩いの場となっていた。



13 多層民家 県指定有形文化財
街道沿いの田麦俣集落は、湯殿山信仰が盛んになるにつれて宿場として栄えた。明治に入り養蚕が盛んになると、「兜造り」に屋根が改造された。
☎0235-54-6103(民宿 かやぶき屋)



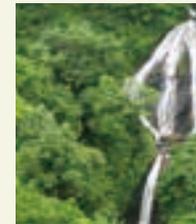
田麦俣の多層民家群 (昭和30年代)
昭和30年代には総戸数54戸の内32戸の多層民家があった。



14 田麦俣番所跡(時計台)
大網口留番所の末口留番所として庄内と内陸から入る旅人らを取り調べていた。

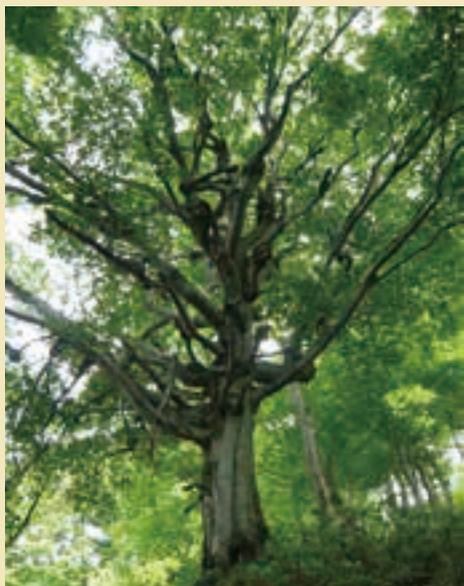


15 蟻腰坂
急坂のため蟻のように地をはいこの名がついたという。明治時を上げる参拝者たちの白装束のになるとジグザグに見える松明の



16 七ツ滝
落差90mで、白糸が流れる。昔、滝の途中に行者が修業があった。

さまざまな表情を見せてくれるブナたち



千手ブナ(表紙の巨木)

千手観音のように枝を広げ、行き交う旅人を見守っている。



ヴィーナスブナ

自然の成せる業!見事な曲線が美しい。



龍神ブナ

古来より気象を司り、国土の安泰を守護する龍神様。似てるかな?



ラブラブナ

生まれる前から赤い糸で結ばれていた二本のブナ。カップルやご夫婦はこのブナの前で必ず「更なる愛の誓い」を…♥



メッセージブナ

「昭和6年12月4日 馬ムカエ 寅治キ 雪三尺 コナイ」が読み取れる。(約90cmの新雪の中、迎えるの馬を待っている様子がうかがえる。)

弘法大師の伝説

湯殿山の開山



湯殿山を開山した人物は弘法大師空海がその一人とされている。

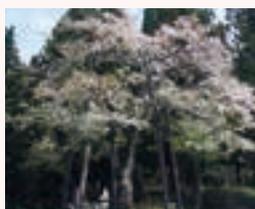
大師は唐から帰朝する際に、文殊菩薩が夢に現れて、日本に三つの霊場があることを告げた。その場所をつきとめるために大師は、日本に向かって独鈷と三鈷と五鈷を投げた。日本に戻りそのありかを探している途中、赤川を遡って朝日村(現鶴岡市)落合まで来て川面を見つめると、フキの葉に隠れて流れてきた「アビラウンケン」という金色の梵字を見つけた。梵字を辿っていけば大日如来の聖地である真言の山に辿りつくと考えて、湯殿山に至ることができたという。天長10年(833)のことで、これが湯殿山の開山と伝えられている。その川は後に梵字川と呼ばれている。

独鈷清水とねじれ杉



弘法大師が持っていた独鈷で大地を突いたところ水が湧き出した。大師は清水で喉を潤し、近くの杉の葉で手を拭いたところ葉の先がねじれたという「ねじれ杉」がある。大正2年に「独鈷杉永代保存ノ碑」が建立された。杉は、昭和32年(1957)に大風で倒れたため、二代目の杉が植えられた。夏茶屋があった。

七五三掛桜(しめかけざくら)



注連寺の境内にある樹齢約二百年のカスミザクラ。湯殿山を開山して願いを果たした弘法大師は、山を下ってここまで来ると、身に着けていた注連(しめ)を外して桜の木に掛けその下に寺を建てたという。咲き始めは白く次第に桃色に変化する神秘的な魅力がある。平成23年10月に東北夢の桜街道88ヶ所巡りの札所として選定された。

柳清水



弘法大師が湯殿山を開こうと塞ノ神峠の近くの清水が湧き出る場所に来た。ここで喉を潤し、近くに生えていた柳の枝を折って箸の代わりにしてご飯を食べ終えると、箸を清水のそばに刺して立ち去った。箸は芽をふいて柳の木に育ち、清水は柳清水と呼ばれるようになった。

弘法茶屋跡



弘法大師が休憩したと伝えられ、江戸時代には夏茶屋があった。茶屋跡には慶応元年(1830)に奉納された灯籠一基と天保三年(1842)に建立した弘法大師供養塔など三基残されている。田麦俣の集落が一望できる眺めのよい場所。

伝統芸能

田麦俣三山神楽

江戸時代後期に内陸地方から伝わったもので、現在も田麦俣の例祭で奉納されている。演目として「獅子舞」「鳥刺し舞」「おかめ」などがある。



28 四ツ谷山の神

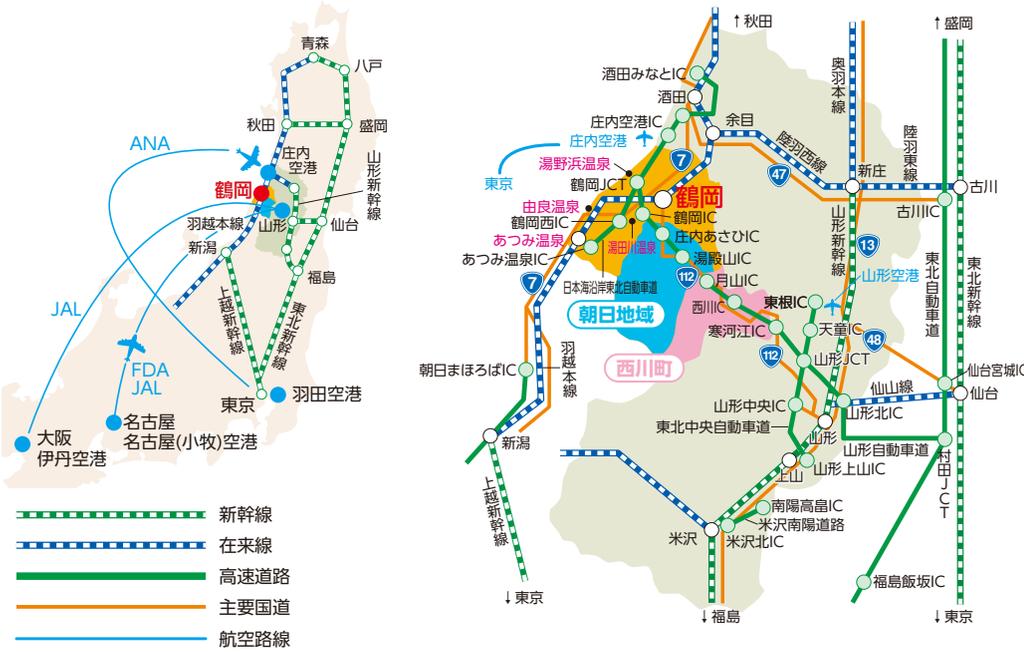
寒河江ダム建設に伴い四ツ谷集落が移転する際、集落内にあった石碑群を合祀した。



29 追分石

「右 湯殿山 左 大井沢」と刻まれている。湖畔から現存する旧道入口へ移動された。

交通アクセス



高速自動車道をご利用の場合	東京 関越道ほか 約4時間20分 東北道 約4時間20分 仙台 東北道 約20分	朝日まほろばIC R7 あつみ温泉IC 山形道 約20分 西川IC 山形道 約60分	日本海東北道・山形道 約50分 湯殿山IC 山形道 約15分 庄内あさひIC R112 車で約25分	鶴岡市 朝日地域 西川町
	東京 上越新幹線 約2時間 東北新幹線 約2時間 山形新幹線 約2時間40分	新潟 山形 仙台 山形 山形道 約40分	羽越本線 約2時間 山形道 約40分	鶴岡市 朝日地域 西川町
航空機をご利用の場合	東京(羽田) 約60分 大阪(伊丹) 約75分 名古屋(小牧) 約60分	庄内空港 山形道 約30分 山形道 約30分 西川IC 山形道 約20分	日本海東北道・山形道 約30分 湯殿山IC 山形道 約15分 庄内あさひIC R112 車で約25分	鶴岡市 朝日地域 西川町
定期高速バスをご利用の場合 ◎予約センター(9:00~18:00) ☎0235-24-7600	東京 東北急行バス 約6時間 庄交バス 約7時間30分 仙台 庄交・宮交バス 約2時間 庄交・宮交バス 約1時間20分 山形 庄交・山交バス 約40分	山形 山交・庄交バス 西川バスストップ約40分、月山口約60分 庄交バス 約40分 庄内あさひバスストップ (庄内あさひIC) R112 車で約5分 西川 バスストップ (西川IC) 庄交・山交バス 約50分 庄内あさひバスストップ (庄内あさひIC) R112 車で約5分	鶴岡市 朝日地域 西川町 鶴岡市 朝日地域 西川町 鶴岡市 朝日地域	

バス・タクシー	
エスモール バスセンター	☎0235-24-5333
高速バス予約センター	☎0235-24-7600
ANA庄交プラザ鶴岡	☎0235-24-3549
落合ハイヤー(街道ハイヤー)	☎0235-53-2121
月山観光タクシー	☎0237-74-2310

装備と持ち物

山歩きできる服装と靴・帽子

スニーカーやズックは危険!黒い色の服装は避けましょう。
 熊よけの鈴は必携。

六十里越街道 ゆかりの人物

弘法大師空海 (こうぼうだいしゅうかい)
 宝龜5年(774)香川県に生まれ、出家して唐に渡り大同元年(806)に帰朝した。その間密教を学び弘仁7年(816)高野山に金剛峰寺を開き、真言密教の高揚に努めた。真言宗を日本にもたらし宗教の拡大をはかり、諸国をめぐる布教して庶民を導いたといわれる。62歳で、高野山の霊地で即身仏になるべくして入定したといわれる。即身仏の信仰はこの伝説により生まれたものであり、湯殿山信仰と深く関わっている。

松尾芭蕉 (まつおしょう)
 俳人。元禄2年(1689)「おくのほそ道」の旅の途中、6月3日~27日(旧暦)まで庄内に滞在し数々の句を残した。湯殿山では「語られぬ湯殿にぬらす袂かな」の句を詠む。門人曾良は「湯殿山銭踏む道の泪かな」を詠んだ。

清河八郎 (きよかわはちろう)
 天保元年(1830)清川村(現庄内町清川)生まれ。16歳で家出して江戸に上り、学問と剣の修業を積み塾を開いた。その後、尊皇攘夷の急進派と「虎尾の会」を結成し文久3年(1863)に暗殺された。八郎の死後、浪士組新徴組、新選組となり明治維新を迎える。江戸へ向かったルートは清川~鶴岡市添川~手向~六十里越街道を通り笹小屋に宿泊した。峠など難所の多い道を1日で40km以上も歩いた。

齋藤茂吉 (さいとうもきち)
 医師にして歌人。明治27年(1894)、13歳の時に六十里越街道を通り鶴岡・酒田方面へ訪れている。初めての湯殿山詣では明治29年(1896)数え15歳の時。15歳になった男子が行く「お山参り」は山岳信仰の世界で一種「成人儀礼」であり、事前に精進潔斎し父に連れられ参詣し、長男 茂太の「十五詣り」でも訪れている。

森 敦 (もりあつし)
 小説家。昭和49年(1974)に朝日村(現鶴岡市)の注連寺での体験をもとにした小説「月山」で第70回芥川賞を受賞。昭和26年(1951)8月に注連寺を訪ね、翌年春まで滞在した。注連寺境内には「月山 すべての吹きの 寄するところ これ月山なり」と刻まれた碑が建つ。

日本風景街道とは?
 日本風景街道は、郷土愛を育み、日本列島の魅力・美しさを発見、創出するとともに、多様な主体による協働のもと、景観、自然、歴史、文化等の地域資源を活かした国民的な原風景を創成する運動を促し、以って、地域活性化、観光振興に寄与し、これにより、国土文化の再興の一助となることを目的としています。



出羽の古道 六十里越街道 [日本風景街道登録ルート]
 登録番号 東北-第11号 (平成19年12月5日認定)

出羽の古道 六十里越街道会議
 (事務局:鶴岡市朝日庁舎産業課内)

「六十里越街道」を山形県の村山と庄内を結ぶ文化的資源として整備保存・活用することを通じ、活力ある地域づくりを推進することを目的とし活動しています。

資料の請求・お問合せ	あさひむら観光協会 [月山あさひ博物館内] TEL 0235-53-3411 FAX 0235-53-2400 〒997-0403 山形県鶴岡市越中山字名平3-1 Eメール/argodia@citrus.ocn.ne.jp HP/ http://www.asahi-kankou.jp/kankou/	月山朝日観光協会 [西川町商工観光課内] TEL 0237-74-4119 FAX 0237-74-2601 〒990-0792 山形県西村山郡西川町大字海味510番地 Eメール/info@gassan-info.com HP/ http://www.gassan-info.com
	鶴岡市朝日庁舎 産業課 TEL 0235-53-2111(代) FAX 0235-53-2119 〒997-0492 山形県鶴岡市下名川字落合1番地	
	六十里越街道の歩ける時期(案内板設置期間) ※残雪量により、歩行可能期間・時期が異なりますので6月末まではお問い合わせください。	残雪量によってはガイドが必要です。右記よりお申込みください。
	◎松根~◎注連寺 ▶5月中旬~11月中旬 ◎護摩壇石~◎湯殿山神社本宮 ▶6月中旬~11月上旬 ◎注連寺~◎護摩壇石 ▶5月下旬~11月上旬 ◎湯殿山神社本宮~◎志津 ▶6月下旬~10月中旬	六十里越街道 山船頭人協会 TEL/0235-53-3411 [(受付)あさひむら観光協会]